

イラン短期研修に参加して私が得たもの

立命館大学国際関係学部3年 森 亜紗佳

2017年12月私がこのイラン短期研修に参加して自分の成長となり、経験として得られたものが2つある。

1つ目は私がどれだけイランという国に対して固定概念を持っているのか。いい意味で十分に思い知らされたということである。中東・イスラーム地域を大学で専攻し半年が経っていたとはいえ、中東の国に足を踏み入れるのはこれが初めてであった。中東に対する偏見や悪いイメージが自分の中でないと思っ

てはいたものの、無意識に、“こんなに綺麗な国なのか”“一人でもう一度訪れても危険じゃない地域だな”とってしまった自分がどこかにいた。現地にいなければ分からない、普段日本では知ることのできないイランを経済・ツーリズム・外交の面から存分に



楽しむ、知ることができたと思う。特に、結婚式でのヒジャブ（スカーフ）はどのようにかぶるのか、ドアのノックの音でどのように来客が男性か女性か知ることができるのか、貨幣の価値が下がり続けているためお金は貯金せず、金貨として蓄えるのが普通、など日常生活にまつわるイラン事情は非常に興味深かった。イスファハーンで建築を観光した時も建物の色使い、模様全てに意味がある。行った先々全てで元最高指導者のホメイニ氏の写真や、12イマームの写真などイスラム教に対する国としての信仰心の強さを感じるものであった。世界史で昔学んだ、「イスファハーンは世界の半分」という言葉はまさにその通りであった。

そして2つ目は、参加者を含む人々との出会いである。イランでも日本でも正直、ここまで優秀な人たちに出会える機会なんて滅多にない。期間中に聞いたみんなの夢、それぞれが何を経験してこの二十数年生きてきたのか。休学中の旅の話、どのような過程で今の専門を勉強しているのか。滞在中も同じ建築

を見学し、講義を聞いていてもみんなの捉え方がそれぞれ面白い方向に違って、毎日みんなの話を聞くことに夢中になっていた。約10日間四六時中一緒にいて、それぞれから聞く話全てが新鮮でかつ自分がどれだけ視野の狭い範囲の中で満足していたのかを思い知らされた。それと同時にこれから自分が何をすべきか、どんな目標に向かって進んでいくべきか十分に考えることができたと思う。

SIRの生徒達も、将来の外交官としてこれからのイランについて、日本との関わりについて真剣に考えていた。イラン対アメリカの関係、日米関係によりイランと日本は結びつきづらい立場であることは確かである。しかしまだ試していないだけで、これから関係を深めて行ける方法はいくらでもあるのではないかと。そしてその架け橋になるような存在になりたい

と私は考えている。身を持

って感じた通り、イランは

様々な面において誤解され

やすい国であるからこそ、

私たちが生の声で聞いたイ



ランの現状を国内外で発信したいと強く感じた。ここで得た経験・知識・人と

の関わりがこれからの私の人生において大きく影響することは確かである。

(1枚目の写真：イスファハーンのイマームモスクにて)

(2枚目の写真：私の誕生日のお祝いしていただいた際の集合写真)